ドクター・ジョンソンと1745年のジャコバイトの乱

―― フローラ・マクドナルドとマルコム・マクラウドを中心に――

江　藤　秀　一

はじめに

ドクター・サミュエル・ジョンソン（Dr Samuel Johnson）は1773年夏から秋にかけて，彼を師と仰ぐジェイムズ・ボズウェル（James Boswell）と，約3ヶ月のスコットランドのハイランド（Highlands）地方とヘブリディーズ（Hebrides）諸島を訪問する。ジョンソンらが旅したヘブリディーズ諸島はかつては名誉革命で追放された国王ジャイムズを支持するジャコバイト（Jacobite）の温床であった。1715年のジャイムズ・スチュアート（James Stewart）を担ぎ出して起こったジャコバイトの乱を平定したイギリス政府は，その反乱の根を絶つために武器の携帯を禁止し，要塞を建設し，軍の配備を容易にするための道路の整備を進めた。それでも1745年，チャールズ・エドワード・スチュアート（Charles Edward Stewart）はフランスからわずかの手下を引き連れてアウター・ヘブリディーズ（Outer Hebrides）諸島へ上陸し，この地域の多くの人々を巻き込んで王位奪還を目指して軍旗を翻したのであった。

この当時，ハイランドやヘブリディーズ諸島は族長を長とする氏族制で成り立っていた。チャールズの呼びかけにハイランドの氏族たちは政府側とチャールズ側に分かれて戦うこととなった。その結果チャールズ側のジャコバイト軍はカロデンの戦いで完敗を喫し，ハノーヴァーのイギリス政府は氏族制こそがジャコバイトの乱の温床だということを再認識し，徹底した氏族制破壊に取り掛かったのである。その結果，伝統的な氏族制は崩壊し始め，それまでの従属関係や価値観がその地域から消えていくことになる。ジョンソンはその崩壊の進む中を旅したのであった。そして，その記録である『スコットランド西方諸島への旅』（以下，『旅』と略記）を1775年に公刊する[1]。その中で，ジョンソンはジャコバイトの乱について，この旅で多くの関係者に会ったにもかかわらずその多くを語らない。

たとえば，ジョンソンらがスカイ島（Skye）からラーセイ島へ渡るとき，彼

らを案内したのはラーセイ島の領主の従兄弟に当たるマルコム・マクラウド（Malcolm Macleod）であった。マルコムはチャールズがカロデンの戦いで敗れてヘブディーズ諸島を逃走する際に，彼を援助した人物である。マルコムはジョンソンらを迎えに来たときにも民族衣装を身にまとっていた。実はカロデンの戦いの後，ハイランドの人々は「武装解除・民族衣装禁止令」によって，武器はもとよりタータンの着用，バグパイプの演奏なども禁止されていたのであった。マルコムはその法令を無視していたわけであるが，ジョンソンはその『旅』の中で，「船はラーセイ島の紳士であるマルコム・マクラウド氏の指揮のもとにあった」（*A Journey*, 58）としか述べず，マルコムの民族衣装やチャールズ逃走の援助に関しては何の言及も行なわない。また，1745年のジャコバイトの乱に関しては，明確に「1745年の乱」とは言わずに，「それほど遠くない昔に，先代の領主は100人の男たちを軍隊の遠征に連れ出した」（*A Journey*, 63）という言い方をするのである。

同じように，チャールズの逃走を援助した人々の中にフローラ・マクドナルド（Flora MacDonald）という女性がいる。彼女はアウター・ヘブリディーズのベンベキュラ（Benbecula）島からスカイ（Skye）島までチャールズを女性召使に変装させて，逃走に手を貸したのであった。そのフローラ宅にジョンソンは1泊し，彼女から当時のいきさつを詳細に聞いたのであった。ところが，その『旅』では，「私たちはマクドナルド氏とフローラ・マクドナルド令夫人によってほかの所と同じように歓待を受けた。同夫人の名は歴史に刻まれ，勇気と忠誠が美徳であるかぎり名誉を持って称えられるであろう。彼女は中背で穏やかな表情，柔らかな物腰，優雅な姿の婦人である」（*A Journey*, 67）としか述べないのである。

なぜ，ジョンソンは『旅』において，ジャコバイトに関してこんなに口が重いのであろうか。本論ではチャールズの逃走を助けたフローラ・マクドナルドの前半生を中心に，ヘブリディーズ諸島におけるジャコバイトの乱の出来事を改めてたどり，ジョンソンが『旅』においてなぜこの件について多くを語らなかったのか，その理由を探ってみる。

1．フローラ・マクドナルドの誕生と家族

フローラ・マクドナルドは1722年，アウター・ヘブリディーズのサウス・ユイスト（South Uist）のミルトン（Milton）で生まれた。サウス・ユイストはク

ランラナルドのマクドナルド（MacDonald of Clanranald）の所有地であった。フローラという名は母方の祖母からの名前である。父はラナルド（Ranald），母はマリオン（Marion）といった。フローラには兄のラナルド（Ranald）がいて，後に弟のアンガス（Angus）が誕生する。父はクランラナルドのマクドナルドの族長とは従弟で，2千500エーカーのミルトンの土地を借り受け，それを更に借地するというタクスマンであった[2]。従ってラナルドの家は島の有力者の縁者であり，暮らしぶりも悪くはなかった。その父はフローラが2歳のときに亡くなり，その4年後に母は同じ氏族でスカイ島のスレイト（Sleat）の分家であるアーマデイル（Armadale）のヒュー・マクドナルド（Hugh MacDonald）と再婚した。ヒューは母方を通してラーセイ島のマクラウド（Macleod）家とつながりがあった。ヒューはフランス軍に従事し，スコットランドへ帰国したばかりであった。ヒューとマリオンはサウス・ユイストのミルトンの土地管理を引き継ぎ，マリオンのフローラを含む3人の子供たちとヒューとの間にできた子供たちとともにミルトンで暮らした。

フローラの幼少時の教育についてはよく分かっていないが，ゲール語を話すハイランドのジェントリー階級にふさわしい教育をベンベキュラ島のナントン（Nunton）で受けたようである。1609年に「アイオナのお触れ」が出されて以来，ハイランドやヘブリディーズ諸島のジェントルマンたちの息子はローランドでの教育が命じられたのであった。女子にはそういうことは要求されてはいなかったが，イングランドの貴族階級の女子と同じような教育が行われていた。フローラは幼い頃マクドナルド氏族の重鎮の親戚に可愛がられた。特に族長の妻であるレイディ・クランラナルド（Lady Clanranald）は彼女を我が子同然に面倒を見，先述のようにナントンの屋敷にしばしば預かって，教育を施したのであった[3]。

フローラは長老派の信徒であった。母のマリオンの父は同じく長老派の牧師であったので，その影響が大きかったと思われる。当時はゲール語の聖書はなかったので，フローラは英語による聖書を読むことができる英語力を十分に有していたと考えられる。ゲール語の世界にとってはジョンソンも述べているようにあらゆる活動に音楽が付き物であったので，音楽の才能は重要であった。フローラは音楽の才能も十分に備わっていた[4]。

フローラが13歳になる頃，レイディ・クランラナルドはフローラを引き取り，その後3年間自分の子供と一緒に家庭教師の下で教育を受けさせた。その後，17歳になるとスカイ島のアレクサンダー・マクドナルド（Alexander MacDonald）

の妻のマーガレットの勧めでエジンバラにて3年間を過ごしたという話が伝えられているが，フローラたちがスカイ島へ渡るのは1745年以後のことであり，それ以前にフローラがスカイ島へ渡った可能性は少ない。ましてやエジンバラに行く可能性はもっと少なかった[5]。

ヒューとマリオンがいつスカイ島のアーマデイルへ移り住んだかについては正確には分かっていないが，先述のとおり1745年以後のことだと言われている。フローラの弟のアンガスが族長ラナルド・マクドナルドの長女ペネロップ（Penelope）と結婚し，サウス・ユイストの土地を引き継いだのであった。そこで，ヒューとマリオンはほかに住む場所を探さなければならなくなった。そんな折の1745年5月15日の聖霊降臨祭の日に，アーマデイルの土地に空きができて，ヒュー一家はスカイ島へ移転したのであった。ヒューはそこでアーマデイルのマクドナルドという名で知られることとなる。

1745年12月，ヒューはマクドナルド氏族の族長であるスレイトのアレクサンダー・マクドナルドによって召集された市民軍の長に任命された。ジャコバイトからスカイ島を守るのがその使命であった。息子のジェイムズはマクドナルド独立部隊の一個隊の騎手に任命された。この部隊は1745年の12月末にインヴァネスへ行軍し，そこに駐留するラウドン（Loudoun）卿とともに政府軍に合流したのである。しかし，この召集は族長マクドナルドにしては失敗であった。本来，氏族民は結束が固く，族長には忠誠を誓うのであるが，盲従するのではなく，大義名分にそむくような場合は族長に反することとなることもあった。アレクサンダーがハノーヴァー軍のために市民兵を募ったとき，1,000人の氏族民を期待したのであったが，歩兵中隊をわずか2部隊しか構成できなかった。ほかの多くの氏族民はジャコバイト側についたのであった。アレクサンダーは父が1715年のジャコバイトの乱の際にジャコバイト側について失敗に帰したことを知っており，今回の乱も失敗に終わると予測したのではないかとデイビッド・マクドナルド（David MacDonald）は考えている[6]。

ヒューの家族がスカイ島へ渡ったとき，フローラは23歳になっていた。このとき彼女はタクスマンの一介の娘に過ぎなかったのであり，このジャコバイトの乱に義父と同じようにかかわるとは夢にも思っていなかった。

2．1745年のジャコバイトの乱とカロデンの戦いの敗北

1714年アン女王が亡くなると，ドイツのハノーヴァー（Hanover）からジョー

ジ（George）が国王としてやってきた。翌年，この即位に反対し，追放されてフランスで亡くなったジェイムズ七世・二世（James VII・II）や，その息子のジェイムズを王位につかせようとする一派がいた。ジェイムズのラテン語名からジャコバイトと呼ばれた人たちである。1715年，マー伯爵（Earl of Mar）はジェイムズ八世（James VIII）国王のために軍旗を翻した。しかし，シェリフミューア（Sheriffmuir）の戦いで破れてしまった。フランスからスコットランドへ渡ったジェイムズはフランスへ戻らざるを得なかった。その後ジェイムズはフランスを去ってローマに落ち着いた。ローマでポーランド国王の孫娘であるクレメンティーナ・ソビエスキ（Clementina Sobieski）と結婚し，1720年12月31日，息子のチャールズ・エドワードが誕生した。1745年，今度はこのチャールズがスチュワート家の王位を奪還すべく立ち上がったが，ジェイムズはそれには参加せず，1766年ローマで亡くなった[7]。

1744年，オーストリア王位継承戦争でフランスとイギリスが本格的に戦争に突入すると，チャールズはフランスへ向かい，イングランドへ攻め入るために軍隊に加わった。1745年7月5日，チャールズは7人の仲間と僅かの兵を引き連れて2隻の船でフランスを出港し，7月23日にサウス・ユイストの南にある小さな島エリスケイ（Eriskay）に上陸した。

上陸したチャールズは島のタクスマンのアンガス・マクドナルド（Angus MacDonald）の小屋で一晩を過ごした。そのタクスマンはチャールズの身分を知らなかった。また，チャールズが泊まったのはブラックハウスと呼ばれるハイランドやヘブリディーズ諸島に見られる典型的な小屋で，泥炭を燃すが，排気孔が十分になく，煙がたまりがちで，チャールズはたびたび外に出て，目をこすったということである。そして，その出たり入ったりにアンガスは業を煮やし，「あの男はなんだ，座ってもいれないし，じっと立ってもいられない。部屋の中にじっとしていられないし，外に出っ放しでもないし」と述べたという[8]。翌日，チャールズは最も近くの領主ボイスデイルのアレクサンダー・マクドナルド（Alexander MacDonald of Boisdale）と会い，援助を申し込んだところ，断られ，そればかりかフランスに帰るように説得されたのであった。そのときチャールズは怒って，「私は帰ってきたのだ」と答えたという。チャールズはアレクサンダーを通してスカイ島のマクラウドやマクドナルドにも支援を願ったが，その依頼に対しては両者とも断り，それどころかチャールズの到着を政府に知らせたのであった。どの族長も1715年の敗戦を覚えており，またチャールズがフランスからの援軍を伴っていなかったことにも不安を抱いたのであった[9]。

7月25日，チャールズを乗せた舟は本土へ向かい，ボロデイル(Borrodale)に上陸し，そこで近くの族長や氏族の有力者が集められ，援助の要請がなされた。はじめは渋っていた氏族長であるが，ついにキンロッホモイダート（Kinlochmoidart）のマクドナルドが支援を表明し，その熱意がほかの氏族長にも伝わり，8月19日，グレンフィナン（Glenfinnan）で軍旗を揚げることが同意されたのであった。

チャールズのスコットランド上陸の噂はエジンバラまで伝わり，当地に駐留していたジョン・コウプ（John Cope）将軍の耳に入った。コウプ将軍はすかさずパース（Perth）駐在の2個中隊をフォート・ウィリアムの要塞強化に派遣した。8月10日に出発した2個中隊は15日にフォート・オーガスタス（Fort Augustus）に到着し，翌朝早朝にフォート・ウィリアムへ向かった。そしてスピーン（Spean）川にかかるハイブリッジ橋を渡ろうとしたとき，この政府軍は突然バグパイプの音を聞き，タータンを着た数人のハイランド人たちが橋の上で剣を振り回しているところを目撃したのであった。政府軍の指揮官が軍曹と兵士に偵察に行かせたところ，2人の氏族民が襲い掛かり，この2人を追い返してしまった。その瞬間に岩の間から雄たけびが上がり，バグパイプのけたたましい音が鳴り響いた。パニックに陥った政府軍はフォート・オーガスタスへ引き返したのであった。このときの氏族兵はティーンドリシュ（Tiendrish）のマクドナルド率いる11人の氏族民と1人のバグパイプ奏者であった。

衝突はこれで終わったわけではなかった。政府軍が逃げる途中にケポック（Keppoch）率いる20人から30人のハイランド人の軍と衝突し，4人が亡くなり，数十人がけがを負い，2個中隊は降伏したのであった。これが45年の乱の最初の戦闘であった。これにはチャールズも大いに励まされた。彼はすでにローマにいる父からの使者によってスコットランドとイングランドの摂政皇太子に任命されていたのであった。彼は大きな希望をもってロッホ・シール（Loch Shiel）へ行軍し，そこからグレナラデイル（Glenaladale）へ舟で行き，一晩過ごした。

翌8月19日の早朝，支援の氏族が集結している勇ましい場面を想像しながらチャールズはグレンフィナンへ向かった。ところがグレンフィナンが見えてきたとき，チャールズは気落ちしてしまった。当てにしていた援軍の姿が全く見えなかったのであった。目に入って来るのは数人の地元の住人と草を食む牛だけであった。チャールズは待った。確かにポツリポツリと人が現れるが大した事は無かった。ところが午後4時頃，バグパイプのけたたましい音が遠くに聞

こえたと思うと，丘の向こうからロヒールのキャメロン（Camerons of Locheil）のおよそ800人の軍勢が鎧かぶとを身にまとって現れた。それに続いて，ケポックのマクドナルドが300人，それにマグレガー（MacGregor）が加わって，1,500人ほどの軍勢に膨れ上がっていた。こうしてスチュアートの旗が掲げられ，戦いの烽火が上げられ，「チャールズ王子，ゲールの国王」という雄たけびが上がる中，チャールズは父親の王位の正当性を述べる演説を行ったのであった[10]。

こうしてチャールズの軍は8月21日，エジンバラ目指して東へ行軍することとなった。この頃にはロンドンにも情報が伝わり，チャールズには3万ポンドの賞金がかけられた。

チャールズ軍の行軍は驚くほど順調であった。途中小競り合いがあったものの，9月17日にはエジンバラに達し，スチュワート家の居城であったホリルード（Holyroodhouse）宮殿を奪還した。ハイランドでは多くの氏族がチャールズの軍に参加してきた。また，各地の有力貴族もチャールズ軍に加わり，イングランドへ進攻を始める頃にはほぼ5千人の軍隊に成長していた[11]。

11月1日，ロンドン目指してチャールズの軍は進攻を再開し，16日にはカーライル（Carlisle）を陥落させ，28日にはマンチェスター（Manchester）へ行軍し，12月4日にはダービー（Derby）に達した。ロンドンまで残す所127マイルほどであった。チャールズ軍のあまりの勢いに，ロンドンの王室は逃亡の準備までしたのだった。しかし，すべてが順調に進んでいたわけでもなかった。イングランドに入ってからの募兵は思い通りにはいかなかった。チャールズは数千人の応募を期待したが，実際に応じたのは数百人であった。参謀のジョージ・マリ（George Murray）とチャールズの作戦面での意見の衝突もたびたびあった。さらにハイランドの兵隊の中には脱走して故郷へ戻る者も出ていた。ついに12月6日，チャールズ軍は戦わずしてスコットランドへ引き返すこととなった[12]。この決定にハイランドの兵たちは落胆し，戦意は失せてしまった。そしてこの撤退は政府軍を勢いづかせることとなった。この頃には，後に「屠殺屋」というあだ名をもらうカンバーランド公ウィリアム・オーガスタスが政府軍の司令官に就任していたのであった。

年が明けて1776年4月13日，カンバーランドの軍はエルギン（Elgin）の4マイルほど西のアルヴィス（Alvis）に達し，14日はネアン（Nairn）に到着した。15日はカンバーランドの誕生日であり，彼はそこで兵隊を集めて祝いたかった。一方，カロデンではチャールズの参謀会議が開かれ，ネアンを襲うことに

決定した。この情報が漏れることを避けるために兵隊たちにはこの作戦は伝えられなかった。ところが思わぬ障害が生じた。食糧が不足し，その日に配給された食べ物はビスケット１枚だけであった。そして夜になり，いざ出撃となったとき，２千人の兵隊たちは食べ物を求めて隊を抜け出したのであった。将校たちはなだめすかして，何とか連れ戻そうとしたが無駄であった。結局，兵隊たちがどこかで腹ごしらえをして戻ってくるのを待つしかなかったのである。

それでもネアン攻撃作戦は実行に移された。カンバーランド軍の所まであと４マイルほどの地点に到着したとき，暗闇での襲撃は時間的に無理だということが判明した。結局，チャールズの軍は空腹で疲れ果ててカロデンまで戻ったのであった。

翌16日の朝，カンバーランド軍は前進してきた。チャールズ軍は作戦について意見が分かれた。前進してネアン川を渡ってカンバーランド軍と戦うべきだという意見と，カロデン・ハウスの南東にあるドラモッシ（Drummossie）高原で戦うべきだという意見とが出されたのである。結局，後者の作戦が選ばれ，戦闘準備に入った。ジャコバイト軍は約５千人，カンバーランド率いる政府軍は約８千人であった。

午後１時頃，２つの軍は戦闘を開始した。ハイランド軍の突撃はカンバーランドの第２列までも及ばず，押し返され，守りについている左翼も混乱に陥り，勝負は１時間ほどでついた。チャールズ側の死者は２千人，カンバーランドの政府軍の死者は300人というチャールズ側の完敗であった。茫然とするチャールズの乗った馬の手綱をヘブリディーズ諸島上陸以来ずっと同行してきたシェリダン（Sheridan）とジョン・ウィリアム・オサリヴァン（John William O'Sullivan）が引き，チャールズを戦場から連れ出した。

戦後のカンバーランドの粛清は「屠殺屋」というあだ名が示すとおり徹底していた。1746年４月の『スコッツ・マガジン』（*The Scots Magazine*）誌にハノーヴァーの将校からの次のような記事がある。

> 高原は血の海となり，我が兵は敵を殺戮し，血の海に足を付けて，その血をお互いにはねかけて，まるで屠殺屋の集まりのようであった[13]。

ファルカーク（Falkirk）で負けを喫したホーリー（Hawley）将軍もその復讐心を燃え上がらせ，カロデンの高原では負傷した兵を皆殺しにしたのであった。ジャコバイトの生き残りは発見されると撃ち殺された。その殺し方も極め

て残酷で，負傷者の脳をマスケット銃でぶち抜くというようなやり方であった。

3．チャールズの逃走とハイランドの人たち

チャールズはその部下であるオサリヴァンらとネアン川沿いの今日のB851にあたる道を通って，ネス湖の南からグレート・グレンを経由して南西へ逃げた。この夜，チャールズはゴートレッグ・ハウス（Gortuleg House）に泊まった。17日はアバーハルダー（Aberchalder）でオイヒ（Oich）川を渡り，インヴァガリー（Invergarry）城にたどり着いた。城は無人となっていたが，オイチ湖に魚の網がかけられていて，2匹のサケが捕まっていた。それが一行の夕食となった。

一方，ジョージ・マリは残兵とともにルースヴェン（Ruthven）兵舎へ逃げ延び，態勢を立て直して再度戦いに挑む計画であった。かなりの兵が近隣から集められた。しかし，4月20日，チャールズからの解散のメモが届き，一行はそれぞれ希望の地へ逃れていった。中には船で大陸へ渡った者もいた。

4月18日，チャールズはロッホ・ロヒーを南に下り，カバノキがおい茂り，日の光もあまり当らないので「暗い道」(The Dark Mile）と呼ばれる道を通り，アーケイグ（Arkaig）湖まで来た。アーケイグ湖沿いにキンロッハーケイグ（Kinlocharkaig）まで来て，そこにある小屋で一晩過ごした。24マイルの道程であった。翌18日，午後5時頃，チャールズと3人の部下はグレン・ピーン（Glen Pean）の道無き道を通り，モーラ湾（Loch Morar）に出て，湾の南側沿いにこれまた道無き道をミーブル（Meoble）まで進んだ。19日はミーブルに泊まり，20日，サウス・モーラ（South Morar）を横断して，ボロデイル近くのグレン・ビーズデイル（Glen Beasdale）まで進み，そこの小さな小屋に泊まった。ここでカロデンの生存者数人と出会い，彼らから戦いの再開について話を聞かされた。しかし，チャールズはジョージ・マリからカロデン前の作戦について酷評する手紙を受け取っており，戦意は失せており，フランスへ戻る決心をしていたのである[14]。

チャールズはグレン・ビースデイルに4月26日まで滞在し，ボロデイルから漁舟でアウター・ヘブリディーズへ出港した。ハイランドに潜むことは彼を追跡する政府軍に見つかる恐れがあった。舟を用意したのはスカイ島のグレンデイル（Glendale）のゴートリル（Galtrigill）のドナルド・マクラウド（Donald Macloed）であった。彼がボロデイルのアンガス・マクドナルドの舟を借りて

きたのであった[15]。マクラウドが舟頭を務め，漕ぎ手は7人の若者であった。ほかに4，5人のチャールズ支持者が同伴した。嵐の中，チャールズらは28日にアウター・ヘブリディーズのベンベキュラ島のロシニッシ（Rossinish）に入港した。そして約2ヶ月間，アウター・ヘブリディーズの島々で苦しい逃亡生活を続けるのである。こうして，フローラとチャールズの出会いのお膳立てが整うこととなった。

ヘブリディーズの島々も決して安全ではなかった。ハノーヴァーの軍艦が出動し，出入の船の尋問が厳重に行われていた。ロシニッシではチャールズが王位を奪還すべくこの地へ上陸したときに曖昧な態度で応じたラナルド・マクドナルドが今度はチャールズを庇護するために力を尽くした。ラナルド自身は島に留まっていたが，その長男が氏族民を率いてチャールズ軍に参加したのであった。天気が悪く，また寒く，泥炭をたき，地元の借地人から差し出された肉やジャガイモでチャールズらは飢えをしのいだ。

4月28日，チャールズらはルイス（Lewis）島へ行き，フランスへ渡るための舟を調達することにした。彼らは北へ向かって舟を漕ぎ出したが，風向きが悪く，途中のスカルペイ（Scalpay）島に上陸せざるを得なかった。そこには島の唯一の借地人であったドナルド・キャンベル（Donald Campbell）が住んでおり，隠れ家を提供したのであった。そこからチャールズの供のドナルド・マクラウドはルイス島のストーノウエイ（Stornoway）へ向かって出発した。

数日後，チャールズらはルイス島へ舟で向かい，オサリヴァン，フェリックス・オニール（Felix O'Neil）ともどもシーフォース湾（Loch Seaforth）の先に上陸し，そこから徒歩でストーノウエイへ向かった。チャールズらは運よくフランスへ渡るためのブリグ型帆船を借りることに成功したのだが，チャールズが潜行しているとの噂がこの島にも入り，船長は疑念を持ち，貸し出しを取り消してしまったのである[16]。

5月6日，チャールズらはスカルペイ島へ戻ろうとしたが，ハノーヴァーの軍艦があちらこちらで捜索しているところを見て，ロッホ・シェル（Loch Shell）の入り口のユーファド（Iubhard）という小さな島に上陸した。小さな小屋で4日間を過ごし，再び小舟でベンベキュラ島のウスカヴァー（Uskavagh）へ行き，小屋に隠れた。そこにはボイスデイルのアレクサンダー・マクドナルドが食事などを運んできた。チャールズらはそこからサウス・ユイスト島へ行き，ベン・モア（Ben More）近くの入り江のコロデイル（Corodale）に隠れ家を紹介される。そこに3週間隠れた。一方，ハノーヴァーの砲艦はミンチ（Minch）海峡

にその数を増し，島々でチャールズの捜索が行われた。このためにチャールズは6月5日から21日の間，海岸線にある洞穴などを根城に転々と逃げ回ったのであった[17]。

6月21日，早朝，ハノーヴァーの600人あまりの兵がチャールズの隠れ場から数マイルの所に上陸した。隠れ場所をハノーヴァー側に知られてしまったらしかった。チャールズはオニールと島の教区学校の校長であったニール・マケヘイン（Neal MacEachain）だけを伴って内陸部へ逃走し，サウス・ユイストの西海岸の家畜番小屋に隠れた。ドナルド・マクラウドやオサリヴァンらほかの供の者たちは，それぞれ別行動を取ることとなった。

4．フローラ・マクドナルドとチャールズのスカイ島への逃走

チャールズがフローラに会ったのはその6月21日の深夜のことであった。ハイランドでは夏には畜牛を丘で飼い，女性がその面倒を見るというのが常であった。そして夏の期間，女性たちは「シーリング」（shieling）と呼ばれる番小屋で寝るのであった。たまたま故郷を訪れていたフローラもこの夜はウナスリィ(Unasary)の番小屋にいたのであった。深夜，ニール・マケヘインがチャールズ，オニールを伴ってこの番小屋へやってきて，チャールズの逃亡を援助するように頼んだ[18]。そのときにチャールズをフローラの女中のベティ・バーク（Betty Burk）に仕立ててスカイ島へ逃走するという計画が話された。この案を誰が最初に作ったかについてはオニール，マケヘイン，フローラの3者で言い分が違っており，正確なところは不明である。フローラの義父のヒュー・マクドナルドの案という説が最も強い。ヒューは先にも述べたとおり，ハノーヴァー側の市民軍の指揮官に就いていたのであるが，実はジャコバイトであった。だから，フローラらがスカイ島へ渡るために必要な偽造パスポートを用意したのであった。誰の案であったとしても，はじめはこの危険な提案に援助を渋るフローラであったが，チャールズを含め，マケヘインらに説得されて，結局，彼女はその申し出を受け入れたのであった。

翌朝，フローラは旅の仕度を整えるべく，ベンベキュラ島のナントンにあるレイディ・クランラナルドの家を訪ね，一方，チャールズはオニールとマケヘインとともにコロデイルの山へ向かってその後の連絡を待つこととなった。ところが，フローラはバンベキュラ島へ渡る途中でスカイ島の市民軍に拘留されてしまった。コロデイルに着いたチャールズはフローラから何の連絡もないた

めにマケヘインをナントンに走らせて状況を調べさせた。マケヘインがカーナン（Carnan）に着いたとき，満潮で先へ進むことができなかった。おまけに兵士に取り囲まれて，結局は彼も捉えられ，指揮官の所に連行されたのであった。しかし，マケヘインの驚いたことに，そこには何とフローラがその指揮官と朝食を取っていたのである。その指揮官とは彼女の義父のヒュー・マクドナルドである。こうしてマケヘインとフローラは解放され，マケヘインはチャールズの所へ戻り，フローラはナントンへ進んだ。そして，一同はベンベキュラ島のロシニッシュで落ち合うこととなった。このときヒューはフローラとマケヘインと，そして，ベティ・バークという名の女性用のパスポートを作成したのであった。このことはヒューがこの計画に当初から関係していたとされる根拠となっている。ヒューはこのとき妻への手紙をフローラに託したが，その手紙には次のように書いてあった。

> 娘をそちらへ行かせます。当地にいる軍に怯えるといけませんので。ベティ・バークというアイルランド人娘が一緒ですが，聞くところではとても糸紡ぎが上手だそうです。彼女の糸紡ぎが気に入ればリントをすべて紡ぐまで置いておけばよいし，羊毛を紡ぐのなら雇うのもよいでしょう。娘にはニール・マケヘインとベティ・バークを付き添わせております[19]。

この手紙もヒューの偽装工作の一端を示すものである。

チャールズの変装には5日ほどかかった。チャールズは当時の男の中でも大柄で，女装用の服が簡単に手に入らなかった。外衣は白木綿で作られ，花柄模様で，大きなフードつきのアイルランド風のマントがついていた。大きなエプロン，靴，靴下なども準備された。

女装にした理由はいくつかあるが，途中で尋問されるとすればそれは召使ではなく女主人にされることが大きな理由であった。またチャールズはゲール語を少しは話せたが，ユイスト訛のゲール語は無理であった。パスポート許可者にマケヘインが含まれていたのも幸運であった。彼にはユイストの訛があり，この一行が疑われる可能性が少なくなるのであった[20]。

6月27日，準備も整い，フローラはチャールズの隠れ場へ出かけた。レイディ・クランラナルドとその娘も同行していた。一行が軽食を取り始めたとき，キャンベル将軍が3マイル先に強力な軍隊を引き連れて上陸したという情報が入ってきた。チャールズ，フローラ，マケヘイン，そして漕ぎ手たちは即座に

海岸へ逃走したのであった。

翌28日，ナントンからの使者によってキャンベルとファーガソンが午前8時にナントンに到着したということが知らされ，レイディ・クランラナルドは12時までに戻ってくるように要求された。レイディ・クランラナルドとその娘は大急ぎでナントンに戻り，キャンベル少将に病気の見舞いに出かけていたとの言い訳をしたが，数日後夫のアレクサンダーとともに逮捕され，ロンドンへ送られたのであった。

同じく28日午後8時，フローラらはベンベキュラ島のロシュニッシュ（Rossinish）からスカイ島へ向かって出港した。漕ぎ手は5人であった。1度はハノーヴァーの軍艦が近くを通ったために，舟に伏せて身を隠し出港を見合わせ，しばらくたった後，ついに出港した。

夜は明るくて，逃走には適さなかった。ミンチ海峡はハノーヴァーの海軍が巡回中であった。一行の舟は24フィートの平底漁舟であった。ミンチ海峡を渡るには適さなかったが，波の合い間に隠れて目立たないという利点があった。到着地はスカイの西側が最も警備が手薄であり，適していると思われた。

スカイ島のウォータニッシュ（Waternish）半島が見えてきたとき，西よりの風が新たに吹き始め，大雨が降り始めた。霧も濃かった。チャールズは上機嫌で1715年のジャコバイトの乱の歌を歌ったという。やがて彼らは岸に近いことに気づいた。ウォータニッシュ半島を回ることになっていたが，漕ぎ手が疲れ果てたために，ウォータニシュ・ポイントに上陸し，1時間ほど休息を取り，再び船に戻った。そして，ウォータニシュ・ポイントを回った所で，マクラウド率いる市民軍の攻撃を受けたのであった。

しかしそれも何とか切り抜けて，フローラらは29日にウイグ（Uig）の北のキルブライド（Kilbride）湾のアルト・ナ・ハワイン（Allt na Chuain）に上陸した。フローラはチャールズを舟に残し，マケヘインとともに叔母のいるモンスタッド・ハウス（Monstadt House）へ走った。今後の逃走の経路に関して意見をもらうためであった。この日は日曜日で，兵士たちも教会へ行ったりして警備は手薄であった。モンスタッド・ハウスはスレイトのサー・アレクサンダー・マクドナルドとレイディ・マーガレット・マクドナルドの住まいであった。アレクサンダーはハノーヴァー側の上級将校であったが，妻のマーガレットはジャコバイトであった。アレクサンダーは本土において職務遂行中で留守であった。マーガレットはフローラの訪問の意図が即座に分かった。彼女はフローラを家の中に招き入れると，キングズバラ（Kingsburgh）のアレクサン

ダー・マクドナルド，カーカボスト（Kirkabost）のマクドナルド夫人，アレクサンダー・マクラウド中尉らに紹介された。フローラは日曜日にもかかわらず巡視で当家を訪れていたアレックス・マクラウド（Alex Macleod）中尉に尋問を受けたが，それをうまくかわし，また中尉も交えて食事をして疑念を持たれないようにしたのであった。

夕食が済むとマーガレットとキングズバラのマクドナルドは壁で囲まれた庭に出て善後策を話し合った。キングズバラのマクドナルドはその前の週に市民軍の任を解かれており，マーガレットにチャールズを自宅に連れてこないように忠告を与えていたのであった。キングズバラのマクドナルドはバーラシェア（Baleshare）のロナルド・ロイ・マクドナルド（Ronald Roy MacDonald）を呼びにやった。ロナルドはカロデンの戦いで足を負傷し，何とか逃げ延びてこの地で治療を受けていたのであった。彼がモンスタッドへ行ってみるとキングズバラのマクドナルドとマーガレットがまだ相談中であった。彼もその議論に加わり，新しい計画が出され，彼は次の段階を整えるためにロナ（Rona）のマクラウドを探しに行った。ロナのマクラウドはスレイトに潜んでいたのである。

一方，マケヘインは海岸に戻ってチャールズをほかの場所へ移すこととなり，最初はモンスタッド・ハウスから南へ4分の1マイルほど行ったシークラダー（Sheoclader）へ連れて行くことになった。しかしさらに協議を続けた結果，キングズバラのマクドナルドがキングズバラの彼の自宅へ連れて行くこととなった。マクドナルドはチャールズの潜んでいる場所へ向かい，彼を探し当てた。そしてキングズバラへ向かうときには夜もすっかりふけていた。

フローラは15時間の緊張した舟の移動で疲れ果てていた。マーガレットは寝床の準備をしていたが，フローラはキングズバラへ行きたがった。結局，カーカボストのマクドナルド夫人とその娘，そしてマケヘインとともに，フローラは日が暮れてから馬でキングズバラへ向かった。途中で礼拝から戻る兵士の一行に出くわした。彼らの話が耳に入ってきた。それは途中で出会った妙な恰好の女の話であった。その振る舞いも彼らには奇妙に思えたのであった。歩き方は男のような感じで，おまけに土地差配人であるキングズバラのマクドナルドに話し掛けていたというのであった。さらに小川を渡るとき，ペティコートの裾を異常にたくし上げていた，というような話も聞こえてきた。ボズウェルもその『ヘブリディーズ諸島への旅日記』でフローラから聞いた話として同じような話を述べているが，そこでは「兵士の一行」ではなく「数人の女性」となっている[21]。いずれにしても，フローラらは順調にキングズバラまで進み，

チャールズらが到着して1時間も経たないうちにそこに到着したのであった。

キングズバラの家ではマクドナルド夫人はすでに床に入っていたが，客の到着で軽食を作るためにベッドから起きだした。マクドナルドは客人を「ミルトンの娘」の友人たちであると偽って報告したが，マクドナルド夫人には女装したチャールズの様子は奇妙に見えた。マクドナルドはチャールズを客間に呼んで，正式に夫人に紹介したところ，夫人は驚き，縛り首になることを恐れてかかわりならないように夫に頼んだ。しかし，マクドナルドは王子援助を強く主張したのであった。アレクサンダー・マクドナルド，マケヘイン，そしてチャールズの3人だけは別に食事をし，夫人は召使にチャールズの正体を悟られないように自ら給仕役を務めたのであった。

チャールズは食事の後，風呂に入り，翌日昼までぐっすり寝た。チャールズが起きたときにはすでにフローラとマケヘインはポートリーへ馬で向かっていた。チャールズは午後も大分過ぎてからアレクサンダーと牛飼いのマクウィーン（MacQueen）という名の少年とともにキングズバラを後にした。家を出るときには召使に疑念をもたれないように相変わらずベティ・バークの恰好をしていたが，途中でアレクサンダーの娘であるアン・マクアリステア（Ann MacAlistair）の夫の服に着替えた。変装用の服のほとんどは焼き捨てられたが，エプロンと靴下留めはフローラの手に渡った。キングズバラの家を出る前にチャールズはマクドナルド夫人に請われて，髪の一束を切るのを許し，それを渡した[22]。彼の使ったベッドのシーツはその後保存されて，マクドナルド夫人の埋葬に用いられた。

チャールズが変装を解くと，マクウィーンが裏道を案内してポートリーまで来た。大雨でずぶ濡れであった。ポートリーでチャールズが身を隠している間にマクウィーンがドナルド・ロイ・マクドナルドを連れて来た。ロイはチャールズをマクナブ・イン（MacNab Inn）に連れて行った。現在はその地にはロイヤル・ホテル（Royal Hotel）という名のホテルが建っているが，ここでチャールズはフローラとマケヘインに会い，2人と最後の別れをしたのであった。「きっとセント・ジェイムズ宮殿（St James Palace）でお会いしましょう」というのがチャールズの別れの言葉であった。こうしてチャールズはフローラとマケヘインに別れを告げ，ロイ・マクドナルドに海岸まで案内された。海岸にはラーセイ島のマルコム・マクラウドが待っていた。ジョンソンとボズウェルをスカイ島からラーセイ島へ案内したのはこのマクラウドである。一方，フローラはマケヘインに付き添われて，アーマデイルの母の元に向かった。

5．マルコム・マクラウドとチャールズ

夜明け近くチャールズらはラーセイ島の西海岸のグラム（Glam）に到着した。この島は隠れ家としては安全ではなかった。ハノーヴァー軍も目を付けており，チャールズを探して徹底的な捜索が行われていたのであった。チャールズがこの島へ来た前の週に激しい略奪と焼き討ちが行われていたのであった。略奪，強姦，すべてが地獄の有様であった。特にキャロライン・スコット（Caroline Scott）の軍は残酷で，ラーセイ島近くのロナ（Rona）島では盲目の少女を強姦し，ラーセイ島では住民からありとあらゆるものを強奪していったのだった。その後スカイ島のタリスカー（Talisker）のジョン・マクラウド（John Macleod）率いる市民軍が何度も島へやってきて，280頭の牛と700頭のヒツジと20頭の馬を殺し，32のボートを破壊し，300の住宅を焼き払った[23]。

翌7月2日の夜，チャールズはラーセイの跡取であるジョン・マクラウド，その弟のマードック（Murdock），マルコム・マクラウドに伴われて，数人の漕ぎ手とともに再び海へ漕ぎ出した。海へ出ると雨が激しく降ってきた。ラーセイ海峡（Sound of Raasay）を渡る頃，風も強まり，波も高くなった。これ以上進めそうになくなり，マクラウドはラーセイ島へ戻ることを提案したが，チャールズは反対した。仕方なく一行は危険を冒しながら漕ぎ進み，再度ポートリーが見えてきた。怯えながら一行は港の北のニコルソン・ロック（Nicolson's Rock）に入港し，マードックの知人の牛小屋で一晩を過ごした[24]。

翌，7月3日，夜が明けるとチャールズは南のストラス（Strath）へ進む意志を固めた。この地区はマキノン（MacKinnon）の領地である。しかし，同伴した者たちはスカイ島の横断は気が進まなかった。チャールズの運命だけではなく一族の運命もかかってしまうからであり，危険すぎたのであった。結局はマルコムのみが同行したのであった。マルコムはチャールズに途中で尋問があった場合は自分の召使として振舞うように言い，グレン・ヴァーギル（Glen Varigill）を通り，スリガハン（Sligachan）湾のそばを通過した。近くのスリガハンの宿にはハノーヴァー軍が駐留していた。

スリガハンからはゆっくりとマルスコ（Marsco）とベン・ジェラク（Ben Dearg）の間を進み，そこからエイノート湾（Loch Ainort）のそばを通り，ブロードフォード（Broadford）で一晩過ごした。翌7月4日，チャールズとマルコムは南岸のロッホ・スラピン（Loch Slapin）へ道を取り，エルゴル（Elgol）へ向かった。途中，足はすりむけ，疲れ果てたマクラウドはその地の村が見え

たときには安堵した。ブロードフォードから30マイルの距離で，時間にして12時間に及ぶ道程であった。そこにはマルコムの姉妹の１人がマキノン族の族長ジョン・マキノンに嫁いでいた。マクラウドらは彼女に温かく迎えられた。チャールズはそこではルイ・コー（Lewie Caw）という名で紹介された。族長マキノンは留守中であり，一行は彼の帰宅を待ち，そのときまでチャールズのことは一切明らかにされなかった。

マキノンが戻ってきて事実を知らされたとき，彼は即座に舟を借りて漕ぎ手を集め，本土へチャールズを渡す手立てをした。もしもチャールズが捕まれば自分たちにも危険が及ぶという族長としての勘が働いたのであった。マキノンは手はずを整えたばかりではなく，自らスレイト湾を渡ってマレイグ(Mallaig)までチャールズを送り届けることを申し出たのである。こうして，マクラウドはラーセイ島へ戻ることを決意し，チャールズと別れたのであった。ジョンソンはコリハタハンのマキノン宅に寄ったとき，ジャコバイトの乱の話を聞いたが，このときのジョン・マキノンの行動は当然ながら話題になったことと思われる。また，ラーセイ島へ渡る船の中でもマクラウドから直接この話を聞いたことはスレイル夫人宛ての手紙で述べてある。しかし，どうしたわけか，『旅』では何も触れられていないのである。

７月５日の朝，マキノンと数人の漕ぎ手は，マレイグ近くの岸辺に上陸した。そこからモーラまで歩いて行き，一晩洞穴で過ごし，10日にはボロデイルに着いた。３ヶ月前に出港した場所であり，前年の７月25日に希望に燃えて上陸した場所であった。ここでマキノンらはチャールズと別れた。マキノンは翌日逮捕された。

一方，チャールズを送り届けたマルコムはラーセイ島へ戻ったが，チャールズがラーセイ島へ来たことは多くの証人がいて，ハノーヴァー軍の知るところとなっていた。マルコムの住まいはその前の襲撃で焼き払われており，彼は召使のドナルド・ニコルソン（Donald Nicolson）と見晴らしの良い高台に身を隠していたが，ハノーヴァー軍に出くわしてしまった。相手方には40人の兵士がいた。マルコムは何とか逃れたが，召使のドナルドはつかまってしまった[25]。

マルコムはロイ・モンゴメリ（Roy Montgomery）という別の召使を雇った。その召使は人目につかない場所を良く知っており，その召使の教えた隠れ場に水も食料もない中で２昼夜を過ごした。それからブレイ（Brae）のマード・マクラウド（Murdo Macleod）のところへ行こうとするが，大雨のため近くの納屋に避難したところを，タリスカーのジョン・マクラウドとその手下に奇襲さ

れた。しかし，それも何とか逃れたのであった。タリスカーのマクラウドの本拠地はスカイ島であったが，先述のように彼の軍隊は毎日のようにラーセイ島へやってきていたのであった。この時期は最悪であった。村人は襲われてマルコムらの居所を尋ねられるが，実際何も知らないのであった。そのために村人は家畜を殺され，ありとあらゆるものを強奪されたのであった。

この召使の少年は腹も減り，マルコムとの逃亡に我慢できなくなり，解雇を申し出た。マルコムは3日目になってそれを認めて，この少年を解雇したのであるが，少年は捕らえられ，縛り首にすると脅されて，マルコムの居所をしゃべってしまったのである。その結果，マルコムは捕らえられてしまったのであった。

マルコムは最初にスカイ島のポートリーへ連行され，その後，スループ帆船でロンドンへ連れて行かれ，1747年7月まで囚人として服役したのである。彼はその後特に大きな罪に問われることなく釈放され，後に述べるようにフローラとともにスコットランドへ戻ることになるのである。

チャールズはその後2ヶ月あまり，フランスへ帰国する機会を求めてハイランドを逃走し続ける。何度も見つかりそうになりながらも，運よく逃れ，ついに9月19日，ボロデイルのロッホ・ナン・ウァム（Loch nan Uamh）に2隻のフランスの船が停泊しているのを確認した[26]。そしてハイランドでチャールズについて来たジャコバイトの残兵とともにその1隻に乗り込んだ。チャールズがハノーヴァー軍の手を逃れて，このように逃げ延びることができたのは，ヒュー・マクドナルドをはじめとして，ハノーヴァーの政府軍に所属しながらも信条としてはジャコバイトである人たちがハイランドにはたくさんいたからである。政府はこのような事態を生み出した裏には氏族制度があると考えた。だからこの乱の後に政府は先述のようにフォート・ジョージに新たな要塞を造り，ジャコバイトの温床とも思われる氏族制度の解体に着手したのであった。

フランスに戻ったチャールズはその後国外追放となり，大陸をさまよい，生まれ故郷のローマに戻った。そこで2回の結婚を経て，1788年1月31日，ローマで亡くなった。晩年のチャールズは酒びたりで，かつての栄光は無くなっていた。彼は大陸放浪中に2度ロンドンを訪ねたことがあった。当地のジャコバイトの様子を確かめ，蜂起の可能性を探ったようである。しかし，その可能性は薄く，蜂起はあきらめた。そして，滞在中に英国国教会の礼拝に参加し，プロテスタントに改宗したのであった。

6．フローラの逮捕

チャールズと別れてフローラの役目は終わった。マケヘインのパスポートも不要となった。そういう証拠はすぐに消されたが，最も重大な失敗は漁舟と漕ぎ手をユイストに戻したことであった。

フローラはマケヘインに付き添われて7月1日にアーマデイルに到着した。その後10日間ほどは静かな生活であったが，12日にタリスカーのジョン・マクラウド少佐の代理人を務めるロドレック・マクドナルド（Roderick MacDonald）の呼び出しを受けた。ドナルド・ロイや母らはその呼び出しに応じないように説得しようとしたが，彼女は聞き入れずにロドレックのところへ向かった。そして，その途中で母らの心配したとおり，フローラはファーガソン大尉に逮捕されてしまったのである。

彼女はチャールズの逃亡について尋問されたが，はじめはキングズバラのマクドナルド一家らをかばって何も認めなかった。しかし，ファーネス号（The Furnace）に乗せられ，スカイ島を離れ，トリドン湾（Torridon Bay）に錨を降ろした後にさらに尋問されたとき，すべてを正直に話したのであった。この告白の後，彼女に対する扱いは丁寧であった。

8月7日，フローラはトリドンでエルタム号（The Eltham）という船に移された。船はスカイ島へ向かい，アーマデイルに入港し，そこでフローラは上陸を許された。彼女は母の元に向かった。当時スコットランド西方方面の海軍司令官であった准将トマス・スミス（Thomas Smith）が母との別れの機会を設けたのであった。母はそのときにフローラの女中ケイト・マクドナルド（Kate MacDonald）の同行を願い出て認められた。

エルタム号はスカイ島からオーバン（Oban）近くのダンスタフニジ（Dunstaffnage）へ向かった。フローラと女中のケイトはダンスタフニジ城に数日間監禁され，その後エルタム号でリーズ（Leith）へ向かい，9月7日にそこに到着した。そこで軍艦ブリッジウォーター号（The Bridgewater）に移され，エジンバラ近辺に11月7日まで留まった。その間にフローラはジャコバイトをはじめ，多くの人たちの訪問を船の中で受けた。中には身代金を払うというような申し入れもあったが，彼女は断った。11月7日再びエルタム号に移されて，国事犯としてロンドンに移送された。

11月18日，ノー（Nore）砂州でロイヤル・ソヴェリン（The Royal Sovereign）号に移された。この船は甚だしく混雑しており，衛生状態も最悪と言われてい

た囚人船であった。その2日後にフローラはロンドン塔に連行されて，そこで8ヶ月間監禁されることとなったが，スミス准将やキャンベル将軍の口添えでウィリアム・ディック（William Dick）という使いの者の屋敷に軟禁されることとなった。その軟禁中にも多くの訪問者があったが，その中には後の国王ジョージ四世（George IV）となる皇太子のジョージも含まれていた。その訪問の動機は弟のカンバーランドへのあてつけであったと言われている[27]。

軟禁とは言え，いつも処刑の恐怖があった。120人が裁判の後に処刑されたが，逮捕後即座に処刑されたものや，拷問で殺された人たちもいた。処刑はタワー・ヒル（Tower Hill）で公開で行われ，多くの人々が見物に集まってきたことはホガース（Hogarth）やロウランドソン（Rowlandson）の風刺画が示しているとおりである。

フローラの監禁がロンドンの社会に与えた影響はたくさんあるようだが，ジャコバイトに対する反感が弱まったというのは意義があると思われる。人々はカンバーランドの残酷さに気づき始め，その人気に陰りが出てきたが，それにも影響を与えた。

1747年，免責法（Act of Indemnity）が議会を通過し，ほとんどのジャコバイトの関係者とともにフローラも解放された。フローラはすぐにはスコットランドに戻らずに，ロンドンのレイディ・プリムローズ（Lady Primrose）宅に寄宿した。プリムローズはフローラの為に寄付を募り，1500ポンドを集めた。フローラはエジンバラへ戻ることとなったが，道中の安全のためにミス・ロバートソン（Miss Robertson）という偽名を使い，ラーセイ島のマルコム・マクラウドが兄のロバートソン役を務めて彼女に付き添った。1747年はカロデンの戦いからまだ15ヶ月ほどしか経っていず，イングランドにおいてはジャコバイトであることは安全ではなかったのである[28]。1747年8月2日，フローラはエジンバラに無事に到着した。

エジンバラではディヴィッド・ビート（David Beatt）の学校へ通い，作文の作法の上達に励んだ。その甲斐あって，彼女の文章力は同時代の多くの人たちの文に比べて，簡潔，明瞭であった。とはいうものの彼女がエジンバラに滞在したのは文章力をつけるのがその目的ではなかった。一番の理由は多くのスカイ島の人たちが亡くなったり，財産を失ったりする中でフローラの罪は軽すぎたということ，財政的にも恵まれていたということであったようだ。つまり多くの人たちからの恨みや妬みが懸念されたのであった[29]。

1748年，4月19日，フローラはスカイ島へ戻る途中で船が難破したものの，ハ

イランド人男性に救われてスカイ島へ戻ることができた。彼女は9月までアーマデイルの母の元に滞在し，エジンバラに戻り，ヨークを旅した。更にロンドンへも行き，1749年まで滞在した。その間にアラン・ラムゼイ（Allan Ramsay）らの肖像画のモデルになった。そのころにはジャコバイトの乱は完全に終わりを迎えていた。1748年10月7日，エクスラシャペルの和平条約（Treaty of Aix-la-Chapelle）によって，オーストリア王位継承戦争は終わり，フランスはジャコバイトをすべて追放し，チャールズもフランスから退去することを求められたのである。チャールズはこれを拒否したために，逮捕されて国外追放となり，大陸をさまよい，生まれ故郷のローマに戻った。その後のチャールズについてはすでに述べたとおりである。

一方，フローラはスカイ島でチャールズをかくまったキングズバラのマクドナルド家のアレクサンダー・マクドナルドの息子のアラン・マクドナルド（Allan MacDonald）と結婚した。ジョンソンらがキングズバラで会ったのはこの2人である。2人はジョンソンも目撃することとなる氏族制の崩壊の最中にあり，ジョンソンが反対を唱えていた移民の道を選ぶことになるのである。そして，1774年8月アメリカに移り住み，後にカナダに渡ったが，体調を崩し，カナダの寒い気候を避けて，フローラは，1779年12月，1人，スカイ島へ戻った。その5年後にアランもスカイ島へ戻り，2人はやっと一緒に暮らすことができたのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1790年，3月4日，フローラは夫のアラン，子供たちのチャールズ，ジェイムズ，アン，ファニーに見取られながら安らかにこの世を去った。末子のジョンはインドにいて最期を見取ることはできなかった。フローラの葬儀は厳粛で感動的であった。葬儀ではスカイ島の有名なバグパイプ学校の学生がバグパイプを演奏し，数多くの追悼の列が続いた。フローラは夫の家族の眠るキルムア（Kilmuir）の墓地に埋葬された。1871年に彼女の墓に大きなケルトの十字架が建てられたが，2年後に吹き飛ばされ，1880年に現在の十字架が建てられた。1792年，アランが亡くなり，フローラと同じ場所に埋葬された。

まとめ

ジョンソンが旅をした1773年はジャコバイトの乱からまだ30年も経過してお

らず，あちらこちらにその乱の影響が色濃く残っていたと思われる。ハイランドやヘブリディーズの島々にはハノーヴァー側についた元兵士もいたし，チャールズ側についた元兵士も健在であった。ラーセイ島ではハノーヴァー軍による襲撃の痕跡もあったであろう。ジョンソンはそのような状況の中を旅し，フローラ・マクドナルドやマルコム・マクラウドといった多くのジャコバイトと面会したのであった。

ジャコバイトの乱では同氏族民でありながら，チャールズ側につく分家と政府側につく分家とがあった。ハイランド軍対ハノーヴァーの政府軍という言い方ではその内実を十分には反映しない。本論で述べたように，スレイトのアレクサンダー・マクドナルド夫妻の場合，夫は政府軍に従軍しており，妻はジャコバイトでチャールズの逃走の援助にもかかわりを持つのである。また，マルコム・マクラウドを逮捕したタリスカーのジョン・マクラウドは同じマクラウド氏族であり，友人同士であった。そしてジョンソンがラーセイ島を訪問した際に，タリスカーのマクラウドも多くの客の１人としてラーセイ・ハウスを訪れていたのであった[30]。ジョンソンはこのようなジャコバイトの乱の関係者と直接会って，話を聞いたのであるが，その『旅』においてはこの件に関して口が重く，明瞭に語らない。ジョンソンはフローラやマクラウドの名を出すものの，ジャコバイトの乱とのかかわりを明確にしない。その理由は彼がこのような氏族民の対立関係に起因するわだかまりのようなものを感じたからではないだろうか。つまり，古傷を触られたくない人々への配慮があったのではないかと思われるのである。さらに，フォート・ジョージが新たに建設され，フォート・オーガスタスも強化されるなか，ジャコバイトの乱について実名を挙げて詳らかにすることは，関係者への更なる疑惑を生じさせ，混乱をもたらす可能性もあったことは間違いない。まだ，氏族制も解体のさなかにあり，人々がイギリス政府に反感を持つ可能性は残されていたのである。ジョンソンがカロデンの近くを通りながらもそこに立ち寄っていないのも同じように関係者への配慮からであろう。1773年は先にも述べたように戦後30年も経っておらず，その地を古戦場と呼ぶにはまだ歴史が浅すぎる。この地の出来事は人々の記憶に生々しく残っており，物見気分で訪れることはできなかったことと思われる。

カロデンの戦いで勝利を収めたイギリス政府は先述のとおり武装解除をはじめ，民族衣装などを禁じた。それに対して政府側についた氏族から不満が出た。また，司法制度が変わったときには訴訟が面倒になったという不満もあった。それにもかかわらず，ジョンソンは『旅』において，「島民の政治的信条に

ついて私は調べたいとは思わなかったし，彼らも自分たちの考えを押し付けがましく述べようとはしなかった。彼らの会話は穏やかで当たり障りがない。彼らは自分たちの主義のために乾杯することを潔しとせず，彼らの食卓には不満の声はない」（*A Journey*, 106）と述べるのである。このような記述になったのも，ジョンソンの関係者への配慮を考えると納得できる。

以上，フローラやマルコムらの生涯とジャコバイトの乱とのかかわりを明らかにすることによって，ジョンソンがなぜ『旅』においてジャコバイトの乱について多くを語らなかったかについての理由の一端が見えてきた。

注

1．テキストは Samuel Johnson, *A Journey to the Western Islands of Scotland*, in *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*, ed. Mary Lascelles, (New Haven: Yale University Press, 1971）を用いた。以下引用は本書を用い，引用箇所は本文中に *A Journey* と共に示す。また，日本語訳はサミュエル・ジョンソン『スコットランド西方諸島の旅』諏訪部仁，市川泰男，江藤秀一，芝垣茂，共訳，（中央大学出版部，2006，3，刊行予定）を基にした。

2．Ruairidh H. MacLeod. *Flora MacDonald: The Jacobite Heroine in Scotland and North America* (London: Shepheard-Walwyn, 1995), 2.

3．Hugh Douglas, *Flora MacDonald: The Most Royal Rebel* (Gloucestershire: Sutton, 1993, new edn, 2003), 10.

4．David MacDonald, *A Wee Guide to Flora MacDonald* (Musselburgh: Goblinshead, 2003), 5.

5．Ruairidh H. MacLeod, *Flora MacDonald: The Jacobite Heroine in Scotland and North America*, 3-4. Hugh Douglas, *Flora MacDonald: The Most Royal Rebel*, 16.

6．David MacDonald, *A Wee Guide to Flora MacDonald*, 9.

7．Gerald Newman, ed., *Britain in the Hanoverian Age 1714-1837: An Encyclopedia* (New York & London: Garland, 1997), 373-74.

8．David R. Ross, *On the Trail of Bonnie Prince Charlie* (Edinburg: Luath Press, 2000), 8.

9．John L. Roberts, *The Jacobite Wars: Scotland and Military Campaigns of 1715 and 1745* (Edinburgh: Polygon, 2002), 78-79. しかし，ラーセイ島のマクラウド氏族は援助した。このとき，ラーセイ島のマクラウドはスカイ島のマクドナルドとスコンサーで会ってチャールズを援助することを決めるが，マクドナルドはその後ダンヴェガンのマクラウドらの手紙に説得されて援助を急遽取りやめる決心をしたという。次の文献参考――Norma MacLoed, *Raasan: The Island and Its People*, (Edinburgh: Birlinn, 2002), 51-52.

10. David R. Ross, *On the Trail of Bonnie Prince Charlie*, 15.

11. John L. Roberts, *The Jacobite Wars*, 102. Grant R. Francis, *Bonnie Prince Charlie and the '45* (New Lanark: Geddes and Grosset, 2000), 55.

12. John L. Roberts, *The Jacobite Wars*, 115. Phil Sked, *Culloden* (Edinburgh: The National Trust for Scotland, 2003), 7-8.
13. David R Ross, *On the Trail of Bonnie Prince Charlie*, 112.
14. Ibid., 113-14. チャールズの逃走経路については主に本書に拠った。
15. Jonathan MacDonald, *Flora Macdonald: The Famous Highland Heroine* (Skye: J. MacDonald, 1989), 9.
16. David R. Ross, *On the Trail of Bonnie Prince Charlie*, 115.
17. John L. Roberts, *The Jacobite Wars*, 201-202.
18. Maggie Craig, *Damn' Rebel Bitches: The Women of the '45* (Edinburgh and London: Mainstream, 1997), 112. このときの事情についてはオニールとマケヘインのそれぞれが自分が最初にこの番小屋へ入ったと書き記しており，またフローラ自身も違った内容を後に知人へ宛てた手紙で述べているので正確なことは不明である。次の文献参照—— Hugh Douglas, *Flora MacDonald: The Most Royal Rebel*, 25-27.
19. Jonathan MacDonald, *Flora Macdonald: The Famous Highland Heroine*, 12.
20. David MacDonald, *A Wee Guide to Flora MacDonald*, 18.
21. James Boswell, *Life of Johnson LL. D.* (1791), ed. G. B. Hill and L. F. Powell, 6 vols (Oxford: Clarendon, 1936-64), v, 89.
22. 誰が実際にチャールズに依頼したのかについても明確ではない。一節によればマクドナルド夫人がフローラを使ってチャールズに依頼したとされるが，フローラはチャールズが就寝中にポートリーへ出かけておりその可能性は少ないようである。最も有力なのは娘のアンという説である。次の文献参照—— Hugh Douglas, *Flora MacDonald: The Most Royal Rebel*, 42.
23. John Prebble, *Culloden* (1961; London: Pimlico, 2002), 222-23.
24. Jonathan MacDonald, *Flora Macdonald: The Famous Highland Heroine*, 18-19. スカイ島におけるマルコムとチャールズの行動については本書と次の文献に拠った。Grant R. Francis, *Bonnie Prince Charlie and the '45* (New Lanark: Goddes and Grosset, 2000), 156-157, 176-186.
25. Noma Macleod, *Raasay: The Island and Its People*, 53-56. 以下，マルコムのことについては主に本書に拠った。
26. このときのフランス船を手配したのはアウター・ヘブリディーズからスカイ島までチャールズに付き添ったニール・マケヘインであった。次の文献参照— Peter A. Simpson, *Culloden and The Four Unjust Men* (n. p.: Peter A. Simpson, 2000), 18-19.
27. David MacDonald, *A Wee Guide to Flora MacDonald*, 29. フローラの囚人時代については主に本書に拠った。
28. Hugh Douglas, *Flora MacDonald: The Most Royal Rebel*, 89.
29. David MacDonald, *A Wee Guide to Flora MacDonald*, 31.
30. Noma Macleod, *Raasay: The Island and Its People*, 55.